

教育実習における気づきと学び

— 実習日誌に見える自己評価からの成長 —

高 橋 克*

要 旨

教育実習は、教職課程の総まとめとして位置づけられている。3週間の教育実習は教師としての教育力の基礎固めとして、大学での教育効果を定着させ確実なものにするには欠かせない。

そのためには、着実な教育実習における自己分析と評価を行い、自己の教師としての課題を設定し、できるだけ早い時期に課題を克服することが必要である。

本学の教職課程は、教育実習での学びを確実に定着させるべく「教育実習（事前・事後指導）」の時間や「教職実践演習」の時間に加え、教職課程センターによる教職合宿での下級生への指導助言の機会を捉えて、振り返りと研鑽、教えることによる学びにより、より着実な教育力を培うことに取り組んでいることが特徴であり、この教育実習後の時期こそが教職課程での重要な時期ととらえている。

そこで、教育実習時の日誌を振り返ることで、より客観性を持った自己評価と教育者としての認識を揺るぎもののないものとする過程をたどる。これら実習後の過程で、教育実習で得られた気づきや学びがより鮮明に定着するのである。

キーワード：教育実習、事前・事後指導、教職課程、コミュニケーション

第1章 はじめに

江戸川大学（以下、本学）は、平成19年（2007）3月16日に文部科学省から中学校教諭、高等学校教諭の免許取得のための教職課程設置の認定を受け、平成19年度入学生から教職課程（詳細は表1参照）が始動した。その後、平成25年10月31日に認可され、平成26年4月1日にメディアコミュニケーション学部にもこどもコミュニケーション学科を新設するに伴って、文部科学省に平成26年（2014）2月5日に幼稚園教諭一種免許取得のための過程認定を受け、同年4月1日から適用され、教職課程に新たな1ページが加わった。

平成26年は、教職課程の更なる充実に向けた

第2スタートの年と言っていいだろう。

さて、大学における教職課程では、教員免許取得に必要な科目を学ぶだけでなく、教師としての心構えや教授技術の基本から一人前の教師としての必須事項を学ぶ。その教職課程に大きな比重を占める教職課程の集大成ともいえる科目として「教育実習」がある。

平成元年（1989）3月の「教育職員免許法施行規則」改正により、中学校・高等学校の教員免許状を取得するには、これまで教育実習の2単位だったものが、事前及び事後の指導の1単位を含む3単位の履修が必要となった。大学は科目として教育実習の事前及び事後の指導を責任を持って行わなければならないことが明示・義務づけられたのである。

そして、科目としての「教育実習（事前・事後指導）」は、これまで各大学で教育実習の一環と

* 江戸川大学

表1 取得できる教育職員免許状の種類（教科）

学 部	学 科	免許状の種類
社会学部	人間心理学科	中学校教諭一種免許状（社会） 高等学校教諭一種免許状（公民）
	現代社会学科 ライフデザイン学科	中学校教諭一種免許状（社会） 高等学校教諭一種免許状（公民）
	経営社会学科	中学校教諭一種免許状（社会） 高等学校教諭一種免許状（公民）
メディアコミュニケーション学部	マス・コミュニケーション学科	中学校教諭一種免許状（国語） 中学校教諭一種免許状（社会） 高等学校教諭一種免許状（国語） 高等学校教諭一種免許状（公民）
	情報文化学科	中学校教諭一種免許状（英語） 高等学校教諭一種免許状（英語） 高等学校教諭一種免許状（情報）
	こどもコミュニケーション学科	幼稚園教諭一種免許状 ※保育士資格

しておこなわれていたものが、より確かな実習を目指し、実習直前に実習業務・実習目標等の確認、実習後の確実な評価・発展を期するために位置づけられたのである。

また、平成21年（2009）の文部科学省令「教育職員免許法施行規則一部改正」により平成22年（2010）年4月1日以後の入学者から「教職実践演習」という科目が追加された。これは、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付け、学生はこの科目の履修を通じて、教員になる上での課題を自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることで、教職生活をより円滑にスタートできるようにするためのものである。

この「教職実践演習」を履修する前に実際の教壇に立つ「教育実習」があり、その記録ともいべき「実習ノート（実習日誌）」にはまさに教員として成長していく姿が赤裸々に語られている。本稿は、拙著2009「教育実習（事前・事後指導）の深化を目指して」『〈江戸川大学紀要〉情報と社会19号』江戸川大学をベースに本学教職課程の現状を確認し、さらに学生が教育実習で使用した教育実習ノートの日誌部分から、気づきや学びに

関する事柄の分析・考察を試みるものである。

第2章 教育実習の概要と意義

第1節 教育実習の沿革

わが国の教員養成は、明治5年（1872）8月の学制頒布によるわが国の近代教育制度の開始に先だって、文部省が明治5年4月22日「小学教師教導場を設立するの伺」を正院に提出し、同5月13日正院から小学師範学校設立の許しがあって、東京にわが国最初の師範学校を設置することを決定したことに始まる。同5月29日、文部省は東京に師範学校設立。文部省は設立趣意書および規則書を各県に配布し生徒を募集。9月授業開始。アメリカにおける師範学校の方法にならって教員養成を開始し、翌明治6年（1873）東京師範学校に練習小学校を付設したことでいわゆる教育実習が始まるとされる。

第二次大戦前の教員の養成は師範学校や高等師範学校等の教員養成を目的とする専門の学校で行うことを基本としていたが、戦後は、「開放制の教員養成」の原則を採用し、幅広い視野と高度の専門的知識・技能を兼ね備えた多様な教員養成を

目的として、教員養成の教育は国・公・私立のいずれの大学でも教員免許状取得に必要な所要の単位に係る科目を開設し、学生に履修させることにより、制度上等しく教員養成に携わることができることとした。

この原則は、質の高い教員の養成や、戦後の我が国の学校教育の普及・充実、社会の発展等に大きな貢献をしてきた。

第2節 教育実習の意義

教育実習とは、教師を志す者が、大学で教員免許取得に必要な科目を学び研究してきた事柄とその他の全ての知識を導入し、実際に教育の場で実践をとおしてその効果を検証し、より良い効果を導き出すために改善する方法を身につけることである。

実際に教育の場で観察、実習、考察をより多く経験や体験を積むことは、教育の意義についての体験的認識と理解を深め、教師としてのあり方を実感することである。

そして、「教えることを通して学び修得する」という教師の本義を実践することで、教育現場に適応した教育実践に変革させる分析力と実行力を確立する機会でもある。

第3節 教育実習の概要

教育実習とは、教科を教えるだけの機会ではない。教師の活動領域はきわめて広く、教科を教えるほかにも次のような事柄があげられる。

① 生徒の理解

学校では、生徒が主役である。生徒は学校で生活し、学び、成長し続ける。学校での生活を基盤に、かれらは友だちをつくり、生活圏をひろげ、知識を吸収し、能力を開発し続ける。このような生徒を、個々の個性や精神面からもじゅうぶん理解すること。

② 教師の仕事の理解

教師は教える人として、学習の場である学校で学習主体としての生徒に学習分野や生徒

指導といった分野で働きかける。同時に、学校の機能の遂行につながる一分野として、さまざまな校務を分掌する。また、生徒の保護者をはじめとする地域社会の生活全般にかかわる教師としてのあり方を意識し、広く文化に関わる自覚を持ち活動する。そういう教師の日常活動を理解すること。

③ 学校の機構と機能の理解

学校は一個の社会的機関である。総体として文化の伝達と創造にかかわっている学校はその仕組みと働きを理解し、地域社会での位置に即してとらえ、さらに国および国際社会全体の水準で学校の機構と機能を理解すること。

以上のように、生徒の理解、教師の仕事の理解、学校の機構と機能の理解を実際に体験する事により、教師の活動領域の広さを理解する機会でもある。

第3章 江戸川大学の教職課程に関する取り組みと教育実習

今日、法制面や社会的注目度など教師を取り巻く環境は大きく変化し、教育現場を取り巻く問題は犯罪の低年齢化や自己中心的な保護者への対応など多方面にわたり山積している。このような時代に教育の現場に出て教師の責務を果たすには、人としての成熟と教師としての幅広く多面的な能力が求められる。

本学は、平成19年3月16日に文部科学省から中学校教諭、高等学校教諭の免許取得のための教職課程設置の認定を受けたのであるが、19年度以前の入学生の教員免許取得希望者にも門戸を広げての始動であった。

さらに、平成18年度で閉学した江戸川短期大学の教職課程で科目等履修生として教師を目指して勉学に励んでいた学生が、短大で修得した教職の科目を活用して新設なった大学の教職課程での教員免許取得に取り組むこととなった。

そのため、本来ならば平成 22 年度から始まる予定であった教育実習が、平成 20 年度からおこなわれることとなり、認可早々の教育実習生の送り出しとなった。

ここに、本学での教職課程に対する取り組みの一端と教育実習までの流れについて述べる。

第 1 節 教職課程・実習センター

本学では、平成 19 年 4 月教職課程開始と同時に、教職に対する意欲と教師としての使命感や責任感の醸成、教科や生徒理解のための専門的知識・技能等の獲得、円満な人間関係を構築するコミュニケーション力の獲得といった教師に求められる資質能力を、学生が身につけるように働きかける目的と、教職課程の円滑な運営と教職課程履修学生の支援を目的に教職課程センターを設置した。幼稚園、保育施設などの実習に対応すべく実習機能の充実を図るため、平成 28 年 4 月 1 日より教職課程・実習センターと改称。

教職課程・実習センターによる教職課程履修学生への支援については次のような事柄があげられる。

① 教職セミナー

セミナーは、教職課程履修学生の 1～4 年生の全員がセミナー員となる。1 年生の出席は任意であるが、2 年生は「教職基礎演習」、3 年は「教職総合演習」、4 年は「教育実習（事前・事後指導）」、「教職実践演習（中・高）」といった必修科目の履修者が合同で毎週火曜日第 1 時限に模擬授業を中心におこなわれる。指導案の作成からセミナー参加学生を生徒役とした授業をおこなうことで、実際の教育現場への理解と対応力を養う、教員としての実践力を身につける勉強会の場である。

また、上記必修科目の担当教員に加え、教科教育法の教員や教職課程・実習センター所属の複数の教員が参加・コメントすることから、教職課程履修学生同士の研鑽の場に加え、教員と学生の模擬授業のあらゆる事柄を

検証する学際的な交流の場ともなっている。そのほか中学校、高校の校長などを経験した講師による講演会、交流会をおこなっている。

② ボランティア活動への参加奨励

ボランティア活動により、奉仕の精神の涵養に加え、コミュニケーション能力の育成、視野を広げることにつながると考え、教職セミナー室に募集要項等を掲示し、教育関係のボランティア活動への参加を奨励している。

③ 教職セミナー室の設置

A 棟 4 F に教職課程履修者が自由に使える部屋「教職セミナー室」を設置している。

各種教科書・資料・雑誌・プリンタ・文具などが揃っており、模擬授業や教育実習に向けた資料の閲覧・作成の場としての使用できる。

また、冷蔵庫・コーヒーマーカー・菓子や軽食の持ち寄りも可能で、学年を越えた教職課程履修者の触れ合いの場としても機能している。

④ 教職合宿

教職課程・実習センターに属する教職員の帯同する夏休み（5 日間）と春休み（4 日間）を利用した合宿で、教師としての基礎学力の養成と模擬授業の指導案作成から実施・講評を集中しておこなう徹底した教師力養成講座である。3 年生以上は参加義務となる。

⑤ 教材研究旅行

教材となっている、文学にゆかりの地や史跡、国際的交流の場所に訪れる臨地研修をする。京都、鎌倉、横浜税関、横浜開港資料館、横浜港などを見学している。

以上のように、教職課程の科目に相互に関係するような事柄を補強し教師への意欲を高め、教育実習に向けて実践的な教師力を身につけること、さらには教員採用試験のための受験指導により学生の教職に就くという目標を全面的に支援するものである。

第2節 教育実習までの流れ

教育実習はカリキュラムにより4年次に実施することとなっている。本学では、そのために必要な条件を示し、教職課程履修学生に指導している。また、必要な条件を満たさない場合はいかなることがあっても教育実習を実施させない。

以下に「江戸川大学教職課程履修の手引き」の7. 教育実習の履修についての教育実習履修の条件についての部分を示す。

③ 教育実習履修の条件について

以下の条件をすべて満たしていること。

- ア) 次の科目を履修・修得済みであること。
「ボランティア論」、「教師論」、「教育学概論」、「教育心理学」、「教育制度論」、「教育課程論」、「教科教育法（社会・公民・英語・情報）」、「教育方法学」、「生徒指導論」、「教育実習（事前・事後指導）」
- イ) 履修している全科目の出席状況が、出席に必要な日数の3分の2以上であること。
- ウ) 教職課程履修費および教育実習費を納済済みであること。
- エ) 江戸川大学教育実習担当者会議による面接を行ない、総合的に判断をして認めた者。

④ 実習予定校から教育実習の受け入れ内諾を、原則として実習の前年度12月末までに得ていること。

以上の条件を満たすことにより教育実習をおこなえるのである。

本学独自の条件として、③のエ) 江戸川大学教育実習担当者会議による面接を行ない、総合的に判断をして認めた者。という項目がある。面接は2年生の後期におこなう。これには3年生の前期の段階で、原則として自身の出身校に教育実習の実施依頼に行くことになるので学生の確固たる信念があるかの確認と、実際の依頼時の面接での予

想質問事項を一通り取り入れた模擬面接とその指導の意味がある。

さて、このような条件でおこなわれる教育実習までの手順の概略を学年ごとにここに示す。

・2年次

- 1、12月中に、教育実習履修事前面接および内諾依頼書下付についての申請をする。
- 2、12～1月中旬に江戸川大学教育実習担当者会議による面接実施。これまでの教職科目の成績等も踏まえ、教育実習の可不可を教職課程・実習センター運営委員会により判定。
- 3、不合格者には教育実習に関する手続きをおこなわない。
- 4、合格者は教職合宿への参加。

・3年次

- 1、面接合格者は、センター長名の教育実習依頼書を持参して実習希望校に申し込む。
- 2、内諾書受領。集約。
- 3、教育実習内諾済み学生の教職合宿への参加。

・4年次（教育実習年度）

- 1、教育実習内諾済み学生は、教育実習（事前・事後指導）を含む教育実習科目の履修をする。
- 2、4月中に学長名の教育実習依頼書発送。
- 3、承諾書受領。集約。
- 4、教育実習事前指導。実習ノート配布。
- 5、教育実習。
- 6、教育実習事後指導。

以上の流れで実習がおこなわれるのであるが、教育実習には4年次履修科目として「教育実習Ⅰ」（高校の免許の場合）・「教育実習Ⅱ」（中学校の免許の場合）のいずれかと「教育実習（事前・事後指導）」、「教職実践演習」の履修が必要となる。

第4章 江戸川大学における教育実習指導

では、教育実習の指導はどのようにおこなわれているのか。さらに教育実習の事前事後の指導に

関する事柄に加え実際に教育実習を終えた学生の実際について記してみたい。

第1節 教育実習の内容

教育実習は、取得する免許に該当する教科指導をおこなうのはもちろんだが、そのほかにも教育現場の多くの領域を経験することとなる。いくつかの領域についてあげてみる。

- 1) 教科の学習指導（教科指導案の作成とその準備、実施および評価）
- 2) 総合的な学習の時間の指導（教科指導案の作成とその準備、実施および評価）
- 3) 学級活動の指導（安全確認・指導計画の作成）
- 4) 道徳の指導（教科指導案の作成とその準備、実施および評価）
- 5) クラブ活動の指導（安全確認・指導計画の作成）
- 6) 生徒会活動の指導
- 7) 学校行事の指導（安全確認・生徒との達成感の共有）
- 8) 必要に応じて個別的な生活指導、PTA活動および家庭連絡
- 9) 票簿等の事務処理
- 10) 職場における教師としての生活

このような多方面にわたる教育活動の全域について観察し、参加することによって大学では学ばない教育現場を体感することとなる。

教育実習は当然正規の教員の勤務と同じ拘束時間となる。授業をやって実習指導教員の評価を受ければ、それでその日の実習は終わりではない。全勤務時間を有効に活用し、実習校の全教育活動を観察し、許される限り参加するようにすべきである。

教育実習の期間は、極めて短時間に圧縮された、大学で学んだことを実践し評価、改良することのできる科学的実践期間である。わずか数週間にすぎない短期間で実習効果をあげるためには、各自の自覚と努力によって、この期間を自分の関わられる教育活動のために、主体的に活用し、指導

教員以外の校内同教科担当教員の学習指導、他教科の教員の学習指導等も観察を含めて積極的に指導を受けることも欠かすことのできないものである。

第2節 教育実習の事前・事後指導の実際

実施の教育実習の事前指導は、学生が実習希望校に赴き実習の内諾を得るまでの指導はもちろんであるが、大学における教職課程全般において常に教師たるものの考え方や物事に対する取り組みの姿勢なども説かれることから教職課程全般が事前指導であると言っても過言ではない。中でも、科目としての「教育実習（事前・事後指導）」は、教育実習の前後の指導という実習に直結した科目として重要な位置を占める。

第1項 科目としての「教育実習（事前・事後指導）」の実際

本学の「教育実習（事前・事後指導）」は、平成18年7月11日の中央教育審議会「今後の教育養成・免許制度の在り方について（答申）」に盛り込まれた、教育実習において教員を志す者としてふさわしい学生を責任を持って実習校に送り出すために、教職課程全体を通じたきめ細かい指導・助言・援助をおこなうことが必要⁽¹⁾という答申の精神を実践したもので、4年生の前後期通年科目である。シラバスには、「実習は教育課程の総仕上げの活動体験であり、それを通して教師としての必要な知識、技術等の資質の高揚に努めることであるという、実習の意義・心得を事前により深く理解して実習に臨む準備をする。また、体験後の報告とまとめを行う」という概要が記されている。

教育実習の事前・事後指導は、模擬授業や教材研究、指導案作成といった教壇に立つ経験を多く積むことによって学生が自信を持って教育実習に臨み、事後に評価しその後の研鑽に活かせるように組み立てられている。これが教職セミナーの母体ともなっている。

第2項 教育実習事前指導の実際

事前事後指導は教職セミナー内での模擬授業を契機に行おこなわれるが、実習の直前には、教育実習の手引きと日誌部分を包括した本学教職課程センター編集・発行の「教育実習ノート」をもとにおこなわれる。以下に教育実習ノートの内容を示す。

(1) 全般的心得

1. 基本的心構え

教育実習は、実習生にとっては指導教員の指導下の実習であるが、生徒にとっては、その全人格生成の教育そのものである。したがって、生徒の人格を尊重し、次のことを常に考えて、責任をもって実行すること。

- a) 熱意と愛情をもって実習する。
- b) 自発的な創造性と旺盛な研究意欲をもって実習すること。
- c) 謙虚でかつ責任をもって実習すること。

教育実習は、以上を考え、実習期間中は実習校の教育方針にしたがって実習することとなる。

もちろん、本学学生たる自覚と実力とを持つとともに、実習校の校長・指導教員に対しては、学生としてふさわしい服装、礼儀、態度をとり、実習校の生徒に対しては、教師としての自信ある態度で接することができるようにしなければならない。

したがって、実習中は、つねに問題を教育の場に求め、その研究を続けるのは、授業の実習とともに大切な目標である。

2. 教育実習中の連絡

実習生は、実習校ごとに、全体、教科別など代表を定め、当該実習校の各教科(科目)主任および教育実習担当主任指導教員との連絡・指示経路を構築する。

(2) 勤務

1. 出勤・退勤

- a、教育実習生の勤務は、実習校の指導教員に準ずるのを原則とする。
- b、出勤は、特別の指示ある場合は別として、必ず始業10分前までに出勤すること。

- c、出勤後は、ただちに出勤簿に捺印すること。
- d、病気その他、一身上の止むを得ない事由により欠勤(遅刻、早退等)をする場合には、事前に指導案をそえて、実習校所定の方法により学校長宛に願い出る。病気欠勤日数3日以上におよぶ時は医師の診断書を添付する。
- e、実習中、実習校の校外に出る時は、必ず指導教員の許可を得る。
- f、退勤時刻は、実習校の指示を厳守する。
- g、校舎内では、実習校所定の規則に従い、校舎の美化に率先して取り組む。

2. 管理・事務

- a、与えられた場合には、指導教員の指導を受けて、校務・学校事務・学級経営等を分担執務する。たとえば、出席簿、累加記録、学級日誌、身体検査簿等の整理記入等。
- b、実習生控室の整備はもちろん、配当学級の教室の管理、特別教室、準備室の管理運営に万全を期すること。

3. 帳簿、校具等の使用

- a、学校に備えつけられている帳簿等を使用しようとするときは、指導教員の許可を受け、正式の手続きを経てからおこなうこと。学校の図書についても同様。
- b、学校の図書、帳簿、校具等で、貸与または使用を許可されたものは丁寧に使用し、使用後は必ず所定の位置に返却する。決して許可なくして校外に持ち出してはならない。

4. その他

- a、学校・指導教員、生徒および生徒の家庭について、職務上知り得た事項は、教育実習中はもちろん、終了後も他人に洩らしてはならない。
- b、大学生としての校外活動を、実習校に持ちこんではならない。
- c、火気の取り締り、水道・電気等の使用に

は細心の注意を払い、特に、実習生控室の管理は注意すること。

- d、実習校での実習生のために設けられる研究会等の実習プログラムには積極的に参加する。

(3) 学習指導

- a、「学習指導案」を作成し、必ず該当授業前日までに指導教員に提出、その指導を受ける。
- b、授業指導をおこなった場合には、指導教員の講評や参観実習生の批評を受け、その要点と自分の反省を「教育実習日誌」に記録する。
- c、本学指導教員の指導、参観があった場合も前項に準ずる。
- d、同じ教科（科目）で同一学級（学年）配当の実習生は、研究のため、または他の実習生欠勤等の場合は、いつでもかわって実地授業をやるように指導案を準備しておく。

(4) 生徒指導

- a、実習校の指導方針に必ず従うこと。
- b、生徒の指導に当たっては、公正明朗であることを期する。
- c、特に、教育実習生は、校外指導、家庭訪問等はおこなわないのを原則とする。また、許可なくして、調査をおこなってはならない。生徒ならびにその家庭との私的な交際は絶対におこなわないこと。
- d、次の諸活動を通じて、当該学校の担当指導教員の指示に従って、生徒の指導に万全を期すること。
 - (ア) 週番勤務
 - (イ) 生徒会の活動
 - (ウ) クラブ会活動
 - (エ) ホーム・ルーム活動
- e、生徒には体罰を与えてはならない。特に要注意生徒の指導は、当該学級の担任指導教員の指示に従っておこなうこと。

(5) 参観

- a、授業参観は、校内、校外を問わず、参観の礼儀を守る。とくに、時間途中の入退室は避けるように心掛ける。
- b、授業参観にあたっては、必ず各自課題を持っておこなうこと。
- c、実習期間中においては次のような参観をすることが望ましい。
 - (ア) 同一指導教員に配当された実習生の授業参観
 - (イ) 同一教科に配当された実習生の授業参観
 - (ウ) 他教科に配当された実習生の授業参観
 - (エ) 特別活動、HR 参観
 - (オ) 同一教科の研究授業

(6) 教育実習日誌

- a、教育実習日誌の各項目は、それぞれの注意事項にしたがって記入すること。
- b、教育実習日誌は、毎日、指導教員に提出、閲覧の上、助言及び捺印をうけること。

以上である。この内容は、折に触れ指導していくのであるが、火曜日1限のセミナーでは学習指導案作成と模擬授業の指導について念入りにおこなっている。実習予定者の模擬授業の実施と講評を中心とした指導で終始し、完璧な授業内容などというものはないのであるが、教師が明確な教育目標と意欲を持って臨むことにより生徒の授業になることを重要とし、自己の持つ教師としての理想像を収斂させ、教育の現場での目標の明確化の必要性を説いている。結果、実習予定者は教壇に立つ自信を抱いて実習に臨むこととなる。

第3項 教育実習中と事後指導の実際

教育実習期間中には「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」の担当教員が巡回指導での実習現場における指導もおこなう。本学では、「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」の担当教員は、「教育実習（事前・事後指導）」の担当教員となっているため、たとえば、実習前の実習校と実習予定学生の打ち合わせの指導などは、連絡の取り方から実習教科の指導範囲

の予習にいたるまで「教育実習（事前・事後指導）」と「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」の指導が同時進行するということになる。

教育実習の本学課程での科目である「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」では、その指導の大半は実習校の指導に委ねているのであるが、実習生はそれまでの教職科目全般で培った教育力と教師としての情熱と使命感で全力を尽くして実習に臨むのである。

教育実習は大学生の日常からすればハードである。そこでは、自己に課した目標や教育現場でしか成し遂げられない実習生の研究課題をしっかりとって主体的に日々の実践を積み重ね、教育実習でこれだけをつかんで帰ろうという意識で臨むことが要求される。ただ単に忙しい毎日を夢中で乗り切り、教育実習を終えたことによる達成感だけにとどまることは教育実習ではない。教育実習によって得た結果や課題を教育実習以後の教師としての自己の研究課題として取り組むための推進力とすることが重要である。

そのため、実習生が教育実習に携行する教育実習ノートの日誌部分を持ちいて、実習中に以下のような、日々の具体的課題を持ちそれにどう取り組んでどうなったかを検証することを指導している。

本学では、実習の実態に合わせ、実習中は以下の事項に日々意識することを求めるものである。

1. 教材の研究を十分したか。
2. 生徒理解に十分つとめたか。
3. 指導計画を綿密に考えたか。
4. 効果的な学習指導案を作成したか。
5. 教具・補助教材を活用したか。
6. 板書を機能的に行ったか。
7. 発問を効果的にすることができたか。
8. 授業の工夫を十分にしたか。
9. 公平に生徒に接することができたか。
10. 正直に生徒に対応することができたか。
11. 特別活動に積極的に参加したか。
12. 学級経営にも気を配ったか。

13. 教師や他の実習生と協力することができたか。

14. 生徒から親しまれ信頼されたか。

15. 自発的に誠実に勤務できたか。

16. 明るく元気に勤務できたか。

以上は、学校の機能、教師の役割、生徒の実態、保護者や地域社会の実態と課題の理解をした上で、教科指導及び教科外指導を担当するのに必要な実践的能力の基礎に関する事柄であろうが、日々の課題として重要である。

教育実習が終わり、学生が大学に戻って来ると事後指導が始まる。各自の実習校での実習模様の報告と研究授業を再現して互いに評価し合う。実習を経験した学生は、教壇に立ったことで学生の視点から教師の視点で物事を捉え理解するようになる。その発言は教師としての発言になっている。

そして、教育実習のまとめとして教育実習の総括レポートを作成提出することとなる。

その後、教育実習を終えた学生の教職課程センターの夏の教職合宿への参加を求め、後輩学生への実習の実際報告と合宿のサポートをおこなってもらうのである。

第5章 教育実習日誌に見える気づきと学び

教育実習の総括レポートでは、大学での教職セミナーや合宿での模擬授業体験の大切さや、発問の大切さなどの教師として必要な技術的な事項の実感を伴った修得の姿。教師としての心の持ち方。教師と生徒との直接な関わりの大切さの実感と実践による、生徒とのコミュニケーションの確立された授業。などがうかがえる。自己評価には、教師としての喜びを知り、教師になることへの意欲の強まりがうかがえ、自己の立場の客観的な把握がなされていることがわかる。

教育実習を終えた学生は、自信を持ったオーラを発して後輩学生に対応するようになる。どのよ

うにしてその変化がもたらされたのか。

ここでは、教育実習の日誌の内容を実習生の記述箇所に対する指導教員の助言という形で抄出紹介し、実習生が教育実習で何に気づき、何を学び、どのように実習中を過ごしたかをいくつかの例を挙げ見てみる。なお、記述は極力原本のまま、必要によっては状況などをくくで追記した。

(1) 中学校社会科I・Cの場合

第1日目…生徒達は生徒同士お互いに注意したり出来ていたのですが、その言葉がすごく乱暴だったので、注意していこうと思います。

授業が始まるまでに授業の準備を終えられていない生徒がいたり席に着かない生徒がいたので、もっと早く次の教室に行きしっかり指導していかなければいけないと思った。

作業の時間を与えようとすごく一生懸命取り組んでいたのですが、私もなるべく作業の多い授業を考えていこうと思いました。

目標としてあげたクラスの雰囲気慣れることと全員に声を掛けることは、生徒と一緒にいる時間が余りなくて達成できなかった。

一人一人の特徴をつかんでクラスになじんでいきたい。

生徒の名前を覚えて自分から話しかけていきたい。

生徒を一人の人間として考え、気持ちなどをしっかり理解した上で良い人間関係を築いていきたい。

教員助言…この感性は忘れずに生徒たちと接してほしいと思います。クラスに溶け込もうと努力されていることも、生徒とも接し方を見て伝わってきました。

第2日目…怒るだけでなく、ちゃんと生徒の心まで届くような接し方を考えて、いろいろ挑戦していこうと思いました。

教員助言…生徒たちを上から押さえつけのではなく、一人一人の心を育てていくことは私自身の課題でもあります。

第4日目…怒鳴るという方法ではなく、生徒自身が自分で気づけるようになれるような指導を心がけます。＜指示棒で他の生徒をつついたり振り回したりする生徒の指導法＞

教員助言…何度言っても聞かないようであれば、取り上げて怒って構わないと思います。そのさい、「他の人を傷つけるかも知れないからいけない」「事故が起きてしまっただけでは遅い」ということを伝えるようにすればいいのではないのでしょうか。取り上げても反省していないようであれば、後で時間を取ってじっくり話をしてもいいのではないのでしょうか。その時は、私も入ります。

第6日目…今日初めて授業をやってみて、一方的に説明する時間の長い時もあるし、板書時間が長すぎて、生徒に背中を向けている時間が長かったりしてしまいました。かたよってしまうと生徒は飽きてしまうので、もう少し生徒が参加する授業をしていきたい。

私の知識不足でだいぶもたついた場面がありました。

毎日ずっと生徒を見ていると、悪いところばかりに目が行ってしまい、怒りっぱなしになってしまいがちですが、その中でも少しでもいいところは褒めて認めること

をしなければいけないと感じました。

教員助言…反省点は次に活かして、今日よりは明日、明日よりは明後日というような気持ちでがんばってください。

学級の状況ですが、落ち着きのなさが増していることは私も気になりました。やはりこちら側が落ち着き、毅然とした態度で臨むしかならないと思います。なかなか自分でも難しいですが……。先生のお考えでいろいろと試してみてください。また、「きつく怒る」ということでしたが、方法としては、呼び出して個別に指導、または話を聞く、という方法もあります。

第8日目…グループ作業にして、もやらずにしゃべっているだけの生徒も多かったので、次回はグループにせず、……個人の力でプリントの穴埋めをするというのもやってみようかなと思いました。

教員助言…グループ作業についてですが、先生のやり方はとてもいいと思います。理想としては、「まず自分で考える」→「分からない」→「周りに聞く」という順序が良いと私自身思っています。「分からないから聞こう」という気持ちを高めた上で机を移動させたり、周りに聞くことを促す、という流れも理に適っていて効果的だと思います。これからも、先生が感じたこと気づいたことをどんどん実行してみてください。

第9日目…もっと発問を増やして生徒の口から応えを導き出せるようにしようと思いました。

話をちゃんと聞く姿勢を作らせてから指示を出したりしようと思います。

自分自身が授業の流れを分かっていたので、教卓から離れることが出来ず、一人一人のことをちゃんと見てあげられなかったと思います。

私の悪いところは生徒の悪ふざけや挑発に乗っかってしまうところです。

教員助言…生徒の実態を捉え、分析し、それに対してきちんと対策を立てて実行に移されている様子が伺えます。

「私の悪いところは……」と書かれています。裏返せば、それだけ生徒に対して一生懸命に向き合っているということです。もちろんけじめをつけることはとても大事ですが。

第10日目…今日は、帰りの会直前のA君の行動はさすがにないなと思ったので、きつく怒ってしまったのですが、先生がいるのに勝手にやっしまい済みませんでした。自分も冷静になれるように気をつけたいと思います。

教員助言…帰りの会の時のA君に対する指導はあれで良かったと考えています。「自分はこれは譲れない」という思いを、たとえ少し感情的になっても生徒にぶつけることは、時にはとても大事です。「日頃きちんと話を聞いてくれ、手を焼きながら相手をしてくれる先生がこんなに怒るということは余程のことをしてしまったんだな」と感じさせることが出来たのではないのでしょうか。きつく叱った後に

必ずフォローする（優しく声かけをしたり、いつもと変わらず接したり、時にはじっくり話す等）ことを忘れなければ大丈夫だと思います。（直後でなくても構いません。生徒も素直になれない場合があるので。）

第13日目…時間配分を考えてやるべきだ。後から入ってきてもその授業の流れが分かるような板書を心がけたいと思います。

教員助言…たくさんの先生方に授業を見ていただき、その先生方のアドバイスを真摯に受け止め、次に活かそうとする姿勢が伝わってきます。

(2) 中学校社会科I・Aの場合

第2日目…先生自身から生徒に近づいて、生徒との距離を近づけていた。なかなか出来ないことなので、自分も真似たいと思った。

教員助言…それぞれの生徒への対応や指導・接し方には意味があってやっていることです。時には大人としての怒りを見せ、ある時は無視して見せたり、またある時は思い切り近づいたり……。これから始まる授業実習は人と人とのつながりから作られるものだという事です。

第4日目…教える立場の教師がその授業の分野に対して、知識があやふやだったら、教えることなど決して出来ないし、おもしろくもない、ただ聞いて書くという授業になってしまう。生徒に興味を持たせるためには、授業の内容をただおこなうのではなく、余談を入れて、笑いを取ったり、途中、途中発問をして、生徒とコミュニケーションを取ることが大事。

教員助言…生徒に10のことを教える時、教

師側が10の準備をしていては授業の展開は出来ません。また、相手は14歳（中2）、言葉・文字等の意味もきちんと押さえていないと理解できなくなります。「笑いを取る」という発想は必要ないと思います。余談はあくまで授業の内容を深めたり、歴史への関心を高めるための補助となるもの。まずは王道を進むことです。

第5日目…用意不足で授業になっていなかった。

おしゃべり原稿というものは、内容が全部頭に入っている上で、もしちょっとでも忘れてしまった時に見るものだからずっと見て、見ながらしゃべるものではない。生徒の方を向いてしゃべるのが大事。

教員助言…しっかりした台本（指導案）、明確な主題（この時間何を学ばせたいのか）、適切な大・小道具（資料）、そして、観客を引きつける俳優の演技（教師の話し方、声の大小、トーン、人柄）、それらがそろって舞台（授業）が成り立つ。実習中は少なくとも台本、主題、大小道具をしっかりさせてほしい。教師側の人間性の問題は、元からの適正と経験の積み重ねで厚みを増せるので、まず出来る準備をしっかりとやること。

第7日目…1時間しか授業では教えないのに、その準備には何時間もかかる。教師というのは、本当に大変だと改めて思った。

リハーサルを何回かやらないとどんな感じで授業が進むのかなど、イメージがなかなかつかめないと思う。ただでさえ、想定外の

ことが起きるのだからそういう事前の準備には手を抜かずしっかりやっていたい。

教員助言…「10の準備で1を教える」つまり、はじめは10倍の時間を掛けないと十分ではないということ。(毎年繰り返すと蓄積されて教師の財産になります。)2週目に入ってもまだ生徒に対して少し引いているところがあります。授業以外に、給食、清掃、運動会練習、部活動等もっと生徒と一緒に活動してください。見ている生徒は寄ってきません。年が近いのだから教師でありお姉さんでもあります。

第9日目…生徒は先生の話をしっかり聞いているようで聞いていない。それは授業も一緒だと思った。先生が言っていることをしっかり聞いているのだけど、実際は身につけていない。ちょっとしたことで小さく板書したりして生徒に残させるようにしていく。

教員助言…中学生の実態が見えてきたようです。学校によって生徒の質や能力に大きな差があり、一概には言えませんが、1回の指示は中学生にとってはただの音。2回目の繰り返しで振り向く生徒が半数。3回目です。しかも指示がわかりやすくはっきりしたものであることが条件です。例えば、授業でページを指示しても全体にはなかなか行き渡っていません。

第11日目…もっと自信を持って授業をしないと、受けている生徒も大丈夫かな？と心配させてしまう。

教員助言…生徒の不安は不信となり不満・反

感へとエスカレートするので要注意。

第12日目…残り5分は、先生が授業の補足をやった。急に教室の雰囲気が変わったようだった。生徒は全員が目目していた。

教員助言…私が授業をやった時の雰囲気が変化するの、いろいろな理由が考えられます。

1、「何か重要なことを話すのではないか」という緊張。2、話の内容に対する興味・引きつけ。3、話し方の工夫、声のトーン。4、日頃からの授業規律の構築など……。では、実習という限られた時間で出来ること、しなければならぬことは何か？ 2、3でしょうか。

第13日目…自分が生徒だった時は全然気づかなかったが、実習として、先生からの視線で気づくことがたくさんあったのでよかった。

努力を重ねれば必ず実るということを教えてくれた。すばらしい運動会に参加できて、本当によかった。

教員助言…運動会での指導はそのまま担任としての学級指導のあり方でもあるのです。

社会科であってもグランド整備をどうするのか、いろいろやっていくことが、いずれは自分に返ってきて形を変え授業に生かされていきます。運動会も授業も事前に99%、本番は1%。当日は楽しくやることです。

第14日目…黒板に書いているのだから、生徒はプリントに書けて当たり前と思っていたが、実際はそうでもない。もっと丁寧に一つ一つしか

りやっていきたい。

教員助言…書くという生徒の活動は、一歩間違えると頭脳のない手先労働になるので、大事なことは、いかに頭を使わせるかということ。

(3) 中学校英語科I・Aの場合

第4日目…何度かおこなっているピクチャーカードと冊子を使用した授業については、少しずつ余裕が出て教室全体に目をやるできるようになってきた。活発に参加している生徒とあまり参加できていない生徒が見えるようになってしまい、焦ってしまうこともあった。しかし生徒一人一人の反応に少しずつ反応できるようになってきた。先生からはテンポや活動の間など、授業としての流れを意識するようアドバイスをいただいた。流れを切ってしまうと授業の雰囲気が変わってしまうことはこの2日間で何度か体験してしまったので、「何のためにこれをやっているのか」を意識し生徒にも理解させるようにしていきたい。

実際の授業内での50分間はとても短く、時間がかかりすぎて終わらないことは避けなくてはならないという考えになった。40人近い生徒に教科としての勉強を教えるという重みを感じるようになってきた。

教員助言…生徒からの予期せぬ発言に対してしっかり受け止め流れの中に組み入れることが出来たのは余裕が出てきた結果だと思います。一人一人の生徒をきちんと受け止めることが、授業全体の集中力やスムーズな展開につながることを実感できたと思います。明日は授業のテ

ンポを意識して、しっかり時間を確保すべき所、スピーディーに進めるべきところ、次へのつなぎ方を工夫していきましょう。

第5日目…本文の解説をおこなう際は、Target sentenceだけでなく、難しい表現にも細やかな説明であり、どこをアンダーラインさせるかをしっかり決めておきたい。授業に対しても「先生、黒板きれいになったね」など反応をもらえ、生徒のためにもっと精進したいと思った。

「I'm from Hiroshima.」と授業内で言った際、授業後に生徒たちが興味を持って話しに来てくれた。授業の本筋から逸れることなく生徒の興味を引くことは慣れないうちにはやはり判断が難しいが、自然な流れの中ではとても重要であると感じた。時間があるうちに考え、しっかりまとめていつでも話せるように用意をおこないたい。

機会があれば3組の英語以外の授業のようすを見てみたいと思う。＜教室移動、休み時間、清掃、課外活動の観察の結果から＞

教員助言…何よりも先生が「本気」で生徒と向き合っていることが、生徒たちにも指導教員にも伝わり、特に学級として力をいただいた1週間でした。生徒と本気で関わることは、教員として非常に大切なことだと考えています。先生の生徒に寄り添う細やかな気持ちや多面的に生徒をとらえることが出来る点に素質を感じました。この「本気」で残り2週間を進んでください。

第6日目…本日は少し連絡もあり、先生にフォローしていただいたが明日こ

そは一人ですっかりこなせるようにしたい。〈朝の会（学活）〉

生徒たちを観察していることが多かったため、自主的な活動を多く発見できた。残りの実習期間にもこれを続け、助言が必要な時とそうでない時を見極められるようにしたい。〈歌声交換会、清掃の生徒の活動〉

教員助言…授業も学活も思いきり取り組んでください。朝の会は10分間という短い時間ですが、落ち着いた雰囲気です。1日を送ることが出来るかどうかが決まる大切な会なので、どんな風に生徒を指導したらよいか工夫してみましょう。

第7日目…練習では一人一人が真剣に取り組んでいた。本番までもう数える程しか日数がないが、3組がつまづいた時には本気でぶつかっていきたいと思う。〈コーラスフェスティバル〉

教員助言…先生がしっかりと生徒の名前を覚えていて授業で指名する時もすぐ自分の名前を呼んでもらえることが、授業のクラスとしての集中力を高めていました。このような小さな変化の積み重ねがさらによい授業を作り出すものなので、すばらしいと思いました。心配りと大鉦を振るう場面を使い分けることを私は心がけています。合唱をしている最中に、笑ったりふらふらしたり、という行動を取ることは学級全体に関わることなので、全体の前で一喝します。一喝なしに済ませてしまうと学級全体の方向が違ってきてしまいます。その後、先生が生徒にお話しして下さり、生徒が真剣な表情で答えて

いた場面がありました。大きな行事の時期にいらして下さったことを幸運に思っています。

第8日目…先生の教員らしい指導の仕方を見て、怒る時は怒る、ほめる時はほめるという教育のあり方について今一度考えさせられてばかりだ。教員が悪いことも怒らない、良いことをしてもほめないということは一番あってはならないことであると日々感じ、実践するようにしている。そのような信頼感が生徒たちを安心させ、集中して授業に取り組もうとする姿勢へとつながっているのだろう。自分の気のゆるみが生徒たちにつながるということも実習中に知ったことだ。自信がなさそうだったり、取りつくろうような様子は、生徒も感じ取ってしまうと思う。授業中は50分間ずっと教員として存在していなければならない。気を引き締めて明日の授業に臨みたい。

教員助言…私が教室に戻ると生徒たちが静かに先生のお話を聞いていました。とても心に残ったようで、後で私にも伝えてくれる生徒がいました。生徒たちに先生の良さが伝わっていると実感しています。〈所用で教室を途中留守にした時〉

英語の授業は、流れやリズムが改善されています。授業は“生き物”なので準備をしっかりした上で、生徒の反応で変更したり、元気がない時は歌を入れてみたりという変更も有効です。

第9日目…準備や学ぶ姿勢の確認として「Are you ready?」などの声かけを増やしていきたいと思う。

教員助言…きっとやりたいことがたくさんあると思いますが、内容はしぼって、実際に授業を受ける生徒の立場で展開を考えると良いと思います。

第10日目…指示がうまくできず、今日の授業では生徒が少し活動しづらそうにしていたり、先にどんどん進んでいたりと、納得のいくアクティビティーにはならなかった。研究授業でもこのアクティビティーを実施しようと考えているため、ワークシート自体も工夫を加え、より活動しやすくなるようなものに仕上げたい。

教員助言…研究授業の最初の10分間は only english でいけるよう練習をしておいてください。生徒たちの授業への集中力が英語だけで始めた方が高まります。

第11日目…がんばってきたことが形にならなかったということは決して失敗ではないということを残り3日でしっかり伝えたい。終わった後、私にも「3組よかったよ」と先生方が声をかけてくれた。本当にうれしかった。このような経験が実習できたことを一生忘れないでいたい。<コーラスフェスティバルで入賞できなかったことを受けて>

教員助言…この時期に教育実習をおこなって一番の良かった点は、コーラスフェスティバルという一大行事に向けて学級がひとつになって、合唱を作り上げる体験を共有したことだと思います。この3週間の間に生徒たちは先輩から友達からたくさん刺激を受け、それを吸収し、自分のもの、学級のものとして成長してきました。3週間前と

は学級の協力体制が格段に良くなっていることも実感されたと思います。教員という職業の醍醐味は、こんな風に生徒たちが成長していく姿を見ることにあると感じています。

第12日目…夜遅くまでご指導いただき、生徒が理解しやすくなるようワークシートを作り直した。しっかりと説明の文章を入れ、生徒同士でどんな会話をするのがねらいで、その活動にしっかり取り組むとどんなゴールがあるのかすぐに見て分かるようにした。明日はこのワークシートで研究授業に臨む。今までいろいろな場面でいただいたアドバイスを頭の中でひとつずつクリアしていけたらと思っている。そして何より笑顔と自信を忘れず楽しみたいと思う。

3組の生徒たちと築いてきた絆を感じ、本当にうれしくなった。だからこそ、今日の失敗を活かし、納得のいく授業がしたいと心から思う。

教員助言…アクティビティーは生徒が主体的に取り組み、また指導者は生徒の動きを掌握しながら進める必要があるのですが、準備をしっかりしたつもりでも実際にはうまくいかないこともあります。うまくいかなかった時は、なぜうまくいかなかったのか原因を探し、改善していくことで、よりよいオリジナルな教材が生まれてきます。失敗から学ぶことは大きいものです。糧にしていきましょう。

第13日目…コミュニケーションを取りながら授業が進められるためには、クラスと教員の間をつなぐ部分が大き

く関わっているということを知り、3週間で3組と作り上げた絆が今回の授業を成功させてくれたのだと感じている。そして、昨日の失敗があったからこそ、今回の授業が完成したのだと思う。もちろん、不安な気持ちもあったが、何とかして成功させたいという思いで授業に臨むことができた。教員としてのやりがいを経験できたと確信している。〈研究授業の個々の評価を終えて〉

教員助言…納得のいく授業を展開することができました。この3週間で吸収したことをすべてぶつけることができた授業だったと思います。生徒たちとの絆が、授業の様々な場面で見ることができ、先生が生徒たちとまっすぐに向き合い、生徒から親しまれ、信頼されたことが伝わりました。3人称単数の導入の授業は、毎年どのような形でおこなうか頭を悩ませています。今回の導入の形は導入方法も練習量も適切だったと思います。

(4) 中学校英語科 A・S の場合

第6日目…今日は初めて授業をおこない、生徒が内容を理解していない、しっかり音読できていないということを強く感じました。原因としては意味の区切りや本文内容の確認不足が挙げられるので、明日以降はこの2点を意識し生徒が有意義な時間を過ごせるよう、しっかりとした授業をおこないたい。

教員助言…“Seeing is believing.” 実際にやる必要がありますね。生徒の様子を観察しながら、授業プランを調整していくことが大切です。教師サイドで流すのではなく、生徒の顔

やつぶやきが見えたり聞こえたりできるといいですね。少なくとも、見よう、聞こうとする姿勢で臨んでください。「生徒を第一に」を心がけて。

第7日目…作業の遅い生徒に配慮して板書を消さないようにすべきだった。生徒がノートに写すことを前提にして板書計画を作るべきだった。学習活動の指示をもっと明確にすべきだった。

教員助言…モアイ像を使っての内容説明はとてもよかったです。自信を持ってやっていいと思います。板書構成もすばらしくよくなってきました。アドバイスの通り取り組む姿勢がいいです。授業時間が早くなってしまった時は、復習や次時の予告を丁寧におこなうとよいと思います。生徒の名前をよく覚えていくのも大事だと思います。座席表をもらって覚えましょう。

第8日目…来週からは生徒との距離の取り方について意識していきたいと思います。今までは、生徒と仲良くなることを意識しすぎていましたが、今後は、しっかり生徒を怒れるようにしていきたいです。

教員助言…授業を効果的に成立させるためには一定のルールが必要です。ルールはすべての生徒を安心な状態で取り組ませるための保険のようなものです。3分前には授業準備をして、教師が来たら自然と立つというような簡単なルールでも、毎日継続して指導していかないとほころびてしまいます。生徒をよく導くために“しかる”ことを恐れなくてください。本当の信頼関係は、ルールの上で成り立つと思

ます。互いに人間力を高めていきましょう。

第13日目…研究授業について、時間が余ることが予想されるため、前時の確認や応用問題に多くの時間を費やす必要がある。学習活動に多くの時間を当てられるため、ワークシートは基本的に暗記にしたいと思う。

今日は、許可を求める際には May I～. 依頼する際には Could you～. となることを理解できていない生徒がいたのでその部分を復習する。

教員助言…いよいよ研究授業の日がやって来ます。発問・板書事項等をよく確認しましょう。この単元で頭に入れておくことは、英語にも敬語があるということ。状況をふまえて話し方を違えるということを生徒に理解させてほしいと思います。たくさんの準備を重ねてきましたので、あとは堂々と授業をやること。発問の仕方も教師であるということを意識し、メリハリをつけてやってみましょう。適度な緊張感も時としては必要です。ファイト！

第14日目…<研究授業当日>板書に日本語を書きすぎた。板書をする際、体を反らして生徒が見やすいように工夫すればよかった。言語活動をする際、役割分担を決めない方がいい。May I～はIが主語なので許しを求める。Could you～はyouが主語なので依頼する等の発言があってもよかった。学習活動も生徒同士でおこなわせ、全生徒が作業を完了できるようにするという方法もあった。

教員助言…この経験はきっと将来役に立つと思います。AETの先生とも積極的に関わり授業を楽しく演出することができました。

教師は教科と生徒指導（中学校は特に）が大事な二要素です。どちらも気を抜かず、注意を払っていくことが大切です。

第15日目…教師になった時に使える指導法をたくさん学びました。

生徒との距離感を大切に生徒の人生を変えられるような教師になりたいと思います。

教員助言…教師の立場、生徒の立場、両方学べたことと思います。一番大切なことはAさんの教師としての強い思い「人を育てる」をいつも心に持っていることです。

- (5) 高等学校情報科H・Sの場合<複数教員から指導されているが教員Kの部分から抜粋>
第8日目…G先生のTAをしていて、私の授業とのやり方の違いに気づくことが多い。まだまだ生徒目線になっていないのか、指示が分かりにくいものになってしまう。だめでも次があると思っていたが、K先生に「生徒に次はない」と言われ、考え方を間違えていたことに反省した。

教員助言…① 実習の記録は小論文ではないのだから、指導教官に読んでいただくつもりで言葉遣いを考えること。

② 記録は、まず、その日のこと→考えたこと→翌日に向けて。とつながるような構成にする。

③ 教員であるという自覚が足りないために生徒にうまく返答できないと思う。受け身ではなく、もっと自ら声をかける（挨

撈も含めて)。あと髪型も社会人らしくすべきと思う。態度や見た目もすべて日頃の自分とは変えてみて、あと半分を過ごしてみてもらいたい。子どもはシビアにあなたを観察しています。

- ④ 実習ノートが書ききれなくらいその日の活動や学びがあったほしいですね。

第12日目…・生徒が体育祭を運営している実感を得た。

- ・最後まで生徒が中心となった体育祭だったことに驚いた。
- ・生徒の自主性に感動するばかりの一日であった。
- ・1年B組の大縄をずっと見ていたが指導はしていない。
- ・生徒の時と違った感動を受けて嬉しくなった。
- ・本当によい体育祭だった。
- ・閉会後も生徒たちの片付けが自主的におこなわれているのを見て感心した。

教員助言…先生は教員として体育祭に臨んでいなかったことがわかる。教師が生徒を見守っているように見えるが、実は用意周到な指導が裏でおこなわれた結果である。当日の善し悪しを評価するのではなく、体育祭の運営を教師がどのように支えているか、また、クラスへの対応、保護者への対応等、学ぶ点は多々あったはずだ。しかし、何も触れられていないどころか、自分が倒れるというお粗末……。情けない。体育祭を通して自分の学年やクラスまたは個々の生徒に何を学ばせたいかを考えてみたかな？そして、学校は「教師、生徒、保

護者、地域」の四身一体で教育をおこなう「場」である。根本的に教師の役割を考え直した方がよいかも知れませんね。

第13日目…おもしろい話しと授業の内容をまとめており、私も真似をしたいと思った。

私は明日授業をやることしか頭になかったことに気づき反省した。もう少しで目標もなくやるところだった。

教員助言…「何でも吸収しよう」という気持ちを持って、どんなことでもまずやってみる姿勢が大切です。

教育実習で何を得ましたか？自分の授業のことだけ考えていれば楽です。言われたままのことをするならもっと楽です。しかし、それは教師としての資質がない人ですし、教採で合格することはないでしょう。専門知識を深く持ち、かつ人としても幅が広く、教育を通じて子どもたちに何かを伝えたいという熱い気持ちを持っている人が現場では必要です。今までの日誌を見ると、先生はあまりにサラリーマンではないですか？子どもが好きですか？何を伝えてどのように育みたいと思っていますか？そういう「熱い思い」や「信念」があれば、学校のどんな現場であっても迫力を持って生徒の前に立てるのです。また、最近の生徒は複雑な家庭環境も多いので、精神的に不安定な場合も多いので、幅広く大学で学んでほしいと思います。

以上である。次に、(1)～(5)を簡単にまとめてみる。

(1) クラス内に特に注意を要すべき生徒がいて、クラス経営に注意と労力を要するクラスを実習の場として与えられた学生は、教材研究や授業内容に関する事項よりも必然的に生徒指導に関する内容の質疑応答の多い日誌になった。一か全体かを選ばなければならない生徒との関係、叱ることへの戸惑いなどに苦悩する姿が浮かぶ。それに対する指導教員の、実習生と一緒に取組んで解決しようとする真摯な対応がある。単に実習生を担当するというより、実習生を教員として処遇し、ともにクラス経営を考えようとしている。この信頼は実習生の自信につながる。

(2) 教育実習生の平均的な姿が浮かび上がってくる日誌の例である。生徒との関係、教材に対する知識の深さ、授業に対する準備の重要性、教えるためのテクニカルな部分、大学での学びと教育現場での学びをつきあわせて、教員の立つべき位置を実感する姿である。指導教員の運動会のたとえば、「事前99%、本番1%、当日は楽しくやることです。」が教育者のなんたるかを示唆しているようである。

(3) 授業の内容に関する事柄と、学校行事における生徒の成長を実感する教員としての喜びを軸に過ごした日々が伝わる。教材研究に時間を割きまじめすぎるきらいのある実習生に、生徒指導に関しても臆することなく自分らしさを出して指導するようアドバイスする指導教員には、小さくまとまりがちな実習生の世界を少しでも広げられればという意味があることが伝わってくる。研究授業の適切な姿に導いてくれた手腕には、同じ道を目指している後輩に対する献身を感じずにはいられない。

(4) 猪突猛進型の実習生が、とにかく授業をいかによいものにするかを追求している武骨な姿が伝わる日誌である。日誌の記述が単文を並べた箇条書きのようなもののため、指導教員が、ごつごつとあちこちにつつかっているような内容を辛抱強く把握し、いかに指導してきたか伝わるものである。

(5) 3人の指導教員による日誌の指導助言の中

でも、及第点の部分以外の辛口な部分から抜き出した。教育実習に出るには学力、指導力不足の心構えができていない学生が、教育実習をした場合の例である。しかし、個々で取り上げた部分は、これから教育実習を目指す学生のよき指針となるであろうものたちである。日誌の書き方から始まり、心構えのあり方、体調管理の重要性、信念の大切さ等々、この実習生の失敗こそ学ぶべき最良の教科書といえる。

第6章 考察

以上にあげた教育実習の日誌の内容から、発問の大切さなどの教師として必要な技術的な事項の実感を伴った修得の姿。教師としての心の持ち方。教師と生徒との直接な関わりの大切さの実感と実践による、生徒とのコミュニケーションの確立された授業などがうかがえる。自己評価には、教師としての喜びを知り、教師になることへの意欲の強まりがうかがえ、自己の立場の客観的な把握がなされていることがわかる。

さらに、教育実習での学びとして、教師は常に先のことを考え行動することが大切で、学校では「何かが終わった次の瞬間には又何かが始まる」、生徒は「課題が与えられて、それが終わると遊びだしてしまう。あるいは、何もしない状態になる」ため、常に次へ次へと考え、指示をだすことが求められる。そのためには、教師のコミュニケーション能力と、教材研究の深さが欠かせないものとなる。

生徒との授業時以外の休み時間、清掃、集会、学校行事でのコミュニケーションは、必ず授業に生きてくることに気づく。さらに、教師は、コミュニケーションを演出する脚本家であり演技者でもあることに気づいている。

また、授業でのコミュニケーションで、効果的な発問（授業）をするには教材研究が大切で、「教師は生徒に1を教えるのに10の準備（時間・資料）をおこなうものである」という言葉を実感し、授業の形態としても大切にすべきことは、生徒に

教えていく授業ではなく、生徒に考えさせる授業であること。そのためには発問の厳選が必要であることを学んでいる。

そして、教育実習の自己評価は自己の不足を明確にしながらも前向きな、教師という仕事の魅力の再確認であったり、「教師になりたい」から「教師になる」という意識の変化であったりする。一度教壇に立ち生徒の反応を感じてしまうと教師の立場に心酔してしまうかのようなのである。

このような、実習での気づきと学びを確固たるものにする「教育実習（事前・事後指導）」の事後指導。教育実習総括レポートと研究授業の反省会レポートの提出。4年生の後期におこなう「教職実践演習」。教職センター、教職合宿での研究授業再現と先輩へ提言をおこなうことにより、教育実習で得られた気づきや学びがより鮮明に定着するのである。

第7章 おわりに

教育実習を体験することは、教師を目指す大学生にとって大学生活の一大事業である。それまでの授業を受けることに慣れた受動的、他律的立場から、自己変革をした能動的自律的で積極性を持った教え導くというリーダー的な立場となる。また、教師として教える立場に立ったことで教師としての喜びを知り、教師になることへの意欲が強まり、自己の立場の客観的な認識と評価、課題発見とその取り組み計画の策定と実行がおこなわれる。

このような科学的な活動と教師になるという情熱に基づいた行動に、教職課程による理想的な教育論や教師像の構築と事前の模擬授業、合宿等による実践力の養成があって初めて実りの多い教育実習となる。さらには、自己の主観的な体験談に終わってしまいかねない教育実習を、大学生活でおこなわれた科学的探求力と学生各自の専攻の専門的な取り組みと、指導教官の指導により培われた理論性によって、客観的に分析評価して普遍的教育活動として認識するまでに至るのである。

教育実習は、学生を成長させる。この得難い機会を最大限に生かし、大学での日々 に於いて教育実習で得たことの定着を確実なものにする支援を継続していきたい。

《注》

- (1) 平成18年7月11日の中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」のⅡ. 教員養成・免許制度の改革の具体的方策、1. 教職課程の質的水準の向上、(3)教育実習の改善・充実の中で、課程認定大学は、教員を志す者としてふさわしい学生を、責任を持って実習校に送り出すことが必要である。各大学においては、これまでも、教育実習の履修に当たって、あらかじめ履修しておくべき科目を示すなどの取組が行われてきたが、今後は、履修に際して満たすべき到達目標をより明確に示すとともに、それに基づき、事前に学生の能力や適性、意欲等を適切に確認するなど、取組の一層の充実を図ることが必要である。また、必要に応じて補完的な指導を行うとともに、それにもかかわらず、十分な成果が見られない学生については、最終的に教育実習に出さないという対応も必要である。

また、同(4)「教職指導」の充実——教職課程全体を通じたきめ細かい指導・助言・援助——には、これまで、教職指導については、課程認定大学により取組に大きな差があったが、今後は、どの大学においても、学生の適性や履修履歴等に応じて、きめ細かい指導・助言・援助が行われるよう、教職指導の充実に努めることが必要である。このため、法令上も、教職課程全体を通じた教職指導の実施を明確にすることにより、各大学における積極的かつ計画的な取組を推進することが適当である。と述べられている。

参考文献

- 中央教育審議会 2006 「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」平成18年7月11日
中央教育審議会 文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm
文部省編集・監修 1981 『学制百年史 史料編』株式会社帝国地方行政学会
文部科学省『学制百年史 史料編 5 年表』
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_194.html
文部省編集・監修 1992 『学制百二十年史』(株)ぎょうせい

文部科学省『学制百二十年史』

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz199201/index.html

江戸川大学教職課程センター『教育実習ノート』江戸川大学教職課程センター

早田武四郎・加澤恒雄 1994 「国立大学と私立大学における教育実習の抱える問題点」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』No.3 和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター

小林宏己 2007 『体系的な教員養成カリキュラムの中核存在としての教育実習——東京学芸大学の教育実習指導体制——』『教職課程』6月号 協同出版株式会社

菱刈晃夫 2007 「教職の原点である教育実習の深化へむけて——経験と思考との循環を目指す国土館大学での取り組み——」『教職課程』6月号 協同出版株式会社

澤登義洋 2008 「教育実習事前事後指導の今後の方向——少数演習形式による教育実習事前指導受講者へのアンケート調査をもとに——」『教育実践学研究』第12号 編集・発行山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

拙著 2009 「教育実習（事前・事後指導）の深化を目指して」『〈江戸川大学紀要〉情報と社会19号』江戸川大学